

その昔、薬局を経営している薬剤師は「街の科学者」と称されたことがあります。当時の薬学教育という有機化学を中心に組み立てられていたが、今回の展示室はそんな調剤室で薬の研究に熱心に取り組む「街の科学者」がモデルの売薬パッケージと、そんな時代を彷彿とさせる天秤をデザインした薬局看板のご紹介です。このように書きまますとかつて市井の薬剤師の代名詞だったとも言える「街の科学者」という言葉は今では使われなくなったように思えますが、実は公益社団法人日本薬学会のホームページには次のような一文が書かれています。

薬剤師はくすりの責任者として、患者さんの笑顔のために奉仕します。わたしたち薬剤師は信頼される「まちの科学者」です。
身近な相談相手として、安心して住める社会をつくるために貢献します。
(日本薬学会のHP) ↓薬学への招待 ↓薬学はヒトにやさしい専門家を育てます。より引用)

調剤や薬の販売に代表される薬剤師の仕事は、現代では在宅訪問や病院においても病棟業務など、より患者さんに接近・密着したものとなってきています。他にも学校薬剤師業務や薬物乱用防止教育、そしてスポーツファーマシストとして、さらには災害時の医療スタッフの一員として避難所の衛生管理までも取り組むようになってきました。
その姿は、かつて以上に国民が薬剤師に求める「街の科学者」としての役割の高まりや広がりを物語っています。そして我々は「街の科学者」としての遺伝子を確実に引き継いでいるものと思います。



きちんとした服装に眼鏡と髭、七三分けの髪型が「街の科学者」の定番スタイルだったようである。



薬棚と机の上の天秤、薬匙、乳鉢などから当時使われていた道具を見ることができる。



製薬企業の製品宣伝用ではなく天秤をモチーフとした薬局の金看板。漆の上に金箔が貼られている。(縦30cm×横40cm)



乳鉢や天秤をシルエットで表現し、ネックの柄まで精密に描かれたデザイン性の高いパッケージ。



並べられた薬瓶にはアミノピリン、抱水テルピリン、カンフル、キニーネなどの文字が書かれている。



襟のない白衣を着て、ペットを扱うめずらしいデザインだが、七三分け、眼鏡、髭の定番は外していない。



白衣を着た薬剤師が薬を測る真剣なまなざしから几帳面な仕事ぶりを感じる事ができる。